巻頭言

戸部隆吉
京都大学医学部、国立京都病院

本誌「ヒマラヤ学誌・第３号」は、文部省科学研究費・厚生省科学研究費により調査した京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画第４次隊（ネパール・クンブ）報告と、同第５次隊（フンザ・カラコルム）報告を中心として編集されたものである。また、京大山岳部による１９８５年のブータンのマサコン峰初登頂（堀了平隊長）の際の学術研究成果についても特集した。

発刊とほぼ時を同じくして、本誌第１号、第２号として編集された京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊１９８９・１９９０年の研究業績に対して、平成４年３月１３日に平成３年度の第２８回秩父宮記念学術賞が授与された。

故秩父宮殿下は、ご生涯を通じてスポーツに関心を寄せられ、とくに「山」に関してはご経験が豊かでご造詣も深かった。殿下のご事蹟をたどると、御年２５歳のときに、槙有恒（のちの日本山岳会マナスル登山隊長）・松方三郎（のちの日本山岳会エベレスト登山隊長）両氏らとともに、ヨーロッパアルプスの峻峰、マッターホルン・モンテローザ・リスカム等に登頂されている。そこには一般の登山道など無い。現在でもごく限られた登山家しか登頂できない山々である。まして登山の歴史を考えると、殿下は当時第一級のアルパインクライマーだったと言っても過言ではない。山へのご愛着はきわめて深いものがあったと拝察される。

同賞は、故秩父宮殿下を記念して、人文・社会科学、自然科学を問わず、「山」に関する科学で顕著な研究業績をあげたものを対象として、一年に一件が授与される。授賞の対象は、自らの実地調査研究活動を中心とし、学術文献として公刊されているものであり、新しい知見またはデータの収集により新領域の開拓または研究の進展に貢献すると認められる研究業績である。

ヒマラヤをフィールドとした新しい医学学術研究というわたしたちの企画と研究成果が、秩父宮記念学術賞の授賞というかたちでお認めいただけたことをすなおに喜びたい。

ヒマラヤ学誌１号・２号をまとめて通覧してみると、隊員のわたしたちでも驚かされるような予期せぬ学術的価値のある結果も示されている。低酸素下における血中ホルモンの動態、長いあいだ不明であった高所網膜出血（ＨＡＲＨ）の眼底カメラ撮影による解明、胃内視鏡検査による超高所寒冷ストレスや潰瘍の発生状況、ヒマラヤの南北における高所住民の疫学調査などをはじめオリジナルな研究結果ばかりである。

これらの研究は、文部省科学研究費、厚生省科学研究費をはじめ各方面のご支援を得られたこと、行動期間中ほぼ好天気に恵まれたこと、各自がそれぞれの立場で最善の義務を果たし得たことなど、多くの好運にも恵まれてこの成果に至ったものである。京都大学はじめ関係機関・各位に対して感謝の意を捧げたい。

ここに、第１号、第２号に引続き、第３号を刊行して、研究成果を公表し、後進の参考に処し得ることは、わたしたちをご支援いただいた多くの方々のご厚志に対する義務の一片を果たすものと考える。第３号では、ネパール・クンブ地方への３回目の調査と、新たにフンザ・カラコルムで展開した疫学調査について報告している。後者は、高知医科大学を主体とした学術調査隊（松林公蔵隊長）として組織運営されたものであり、「長寿伝説の里」（高知新聞社刊、１９９２年２月）という一般向け書物がすでに刊行されている。ぜひ参照されたい。京都大学ヒマラヤ研究会は、１９９２年度には、①ネパール・クンブ地方への４回目の調査、②フンザ・カラコルムへの２回目の調査、③ボリビア・アンデスへの新展開を企画している。今後とも一層のご支援をお願いしたい。

最後に、昨年１月中国雲南省の未踏峰・梅里雪山（メイリンシュエシャン）に逝った日中１７名の若人の霊に対して深く哀悼の意を捧げたい。京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊による１９８９年のムズターグアタ登山、１９９０年のシシャパンマ登山とちょうど平行して、２次にわたる梅里雪山の学術登山計画がすすめられた。いずれの登山も、遠征の母体はすべて京都大学学士山岳会である。梅里雪山隊の井上治郎隊長は、日本の雪氷学を代表する若手研究者であり、ネパール・ヒマラヤ氷河学術調査隊の一員として第１７回（昭和５５年度）の秩父宮記念学術賞を受賞した。井上隊長をはじめ、佐々木哲男、清水久信、近藤裕史、米谷佳晃、宗森行生、船原尚武、広瀬顕、工藤俊二、笹倉俊一、児玉裕介の若き岳人たちは、いずれも前途洋々たる学究の徒でもあった。同窓・同学の岳友のその早すぎる死は惜しみてもあまりある。今はただ、かれらの志のあった高き処に思いをめぐらし、ヒマラヤ学のさらなる発展を期したい。

京都大学ヒマラヤ研究会を代表して　戸部隆吉